

三井のリフォーム 住生活研究所長 西田 恭子

いまどきの二世帯リフォーム

一世代前の話になるが私が学生だった頃、大学に通うため上京した友人は「風呂なし・六畳一間」、場合によっては風呂もトイレも共用というアパートに住んでいた。親から援助が受けられないわけではないのだが、学生はそういうものという風潮だったようだ。

時代は変わり、今は誰でも住宅のグレードやこだわりへの意識が高く、「都会に子供を出すのは大変」と言いながら、親御さんもかなりの家賃の部屋を借り与える方が多い。そんな環境下で社会人となった若者は、結婚しての新居にある程度のレベルを求めるようだ。六畳一間でミカン箱からのスタート「など」という言葉は死語となっている。

だが、目の前の現実は厳しい。安定した収入やこれからの収入増加が見込めずにいる若年層にとって、これはと思う住宅取得は難しい。そこで、親の家を視野に入れた二世帯住宅が浮上している。新築住宅で検討したものの、予算に合う物件に出会えず、リフォームでの住宅取得を考える方は多い。さらに二世帯住宅に

住む経済的メリットは、月七万円という話も聞いた。駐車場代から始まったの車の共用使用、固定資産税、電話代やネットの使用料等々、確かに積み重ねていくとそんな数字も領けるのかもしれない。

また、共働き夫婦が主流となっている中で、子育ての面で「親近」に対するメリットを感じるようになってきている。一方、親世代は「子供を育て上げ、さらに孫の面倒などんでもない」と言っていた方も、いざなつたると驚くほど一生懸命協力される。ある意味経験者がスキルを披露できる場でもあり、ほめてはあげないのかもしれない。日頃の仕事でも、自分ができることをさせて見守るのは難しいものだ。自分でやる方が早いし、確実に、ミスもないと思うとなおさらなのだが、持ち分を踏まえてじっと我慢することが大切だ。

二世帯住宅への改装においても、今までの一住戸一世帯の延長線上で考えるのは危険だ。お互いの領域にずかずか入り込まず、でも大きな方向違いは正すこ

とができる距離感であること。またお互いに一緒に住むことが、豊かな暮らしにならなければ意味がない。経済的メリットと職場に近い利便性だけを求めている「完全分離型二世帯」がうまくいくとは限らない。ひとつ屋根で暮らしていることには変わりはなく、相手の存在・物音が中途半端に気になってしまい、「これなら離れて住んでいた方がよかった」という親御さんもある。「完全分離」という言葉もいかなるものか。

個人的には、日常生活は完全に独立している方がトラブル回避になると思うのだが、そうすることが生活に全く関わらない分離を意味しているわけではないだろう。独立しながらも共存共感できる部分があつてこそ、近くに住む意味もあり豊かさにつながると思うのだ。

今の若い人たちは賢い。相続税法も改定になり、「小規模宅地等の課税価格の特例」減税をねらつての二世帯リフォームも確かに多いが、それ以上に、家族として絆の大切さを認識しているようだ。



西田恭子氏プロフィール＝一級建築士。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム 住生活研究所」所長。リフォーム設計の経験を活かし、新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常勤講師。インテリア学会会員。日本建築家協会正会員。